

一橋大学博士学位申請論文審査報告書

平成 27 年 3 月 11 日

申請者 増古剛久

論文題目 オガデン戦争を巡る国際関係史―脱植民地化、国家形成そして冷戦

審査員 山田敦 大芝亮 青野利彦

現在もアフリカでは、「破綻国家」という言葉に象徴されるような政治・経済上の混乱状況が存在している。このような状況の歴史的背景を探ることを目的に本論文は、ソマリアとエチオピアの間で戦われたオガデン戦争（1977～78 年）の展開と、同戦争に対する米ソ超大国の介入の様相を実証的に明らかにしようとするものである。

本論文の優れた点として第一に、オガデン戦争をめぐる国際政治を、米ソによる一方的な介入の過程と捉えるのではなく、ソマリア、エチオピアという現地の紛争当事国を能動的なアクターとして描くことで、米ソ超大国と、ソマリア、エチオピアという小国の四者間で展開された国際関係史として分析したことがあげられる。ソマリアとエチオピアについては、米ソ（特に米国）と比較して政策決定過程を検証できる史料の入手が極めて困難であるが、申請者は、米国立公文書館、カーター大統領図書館、英国立公文書館の所蔵史料、公刊史料や新聞に加えて、先行研究がほとんど利用していないケニア及びエチオピアの国立公文書館やアフリカ現地の新聞など、幅広い史料を収集・分析することでこの問題を克服するよう努めている。

第二に、冷戦下の 1977 年から 78 年にかけて発生したオガデン戦争を、19 世紀末以降に展開されたソマリアとエチオピアの間の紛争とそこに対する諸大国の関わりという、より長期的な史的文脈に位置づけていることである。これによって本論文は、西欧による植民地化と第二次大戦後の脱植民地化の流れの中でオガデン戦争勃発の背景が形成され、それが更に 1970 年代の米ソ冷戦の文脈と交錯していく過程を描き出している。すなわち「米ソ冷戦における地域紛争」という一般的な理解を超えた、オガデン戦争の多面的な歴史像を打ち出すことに成功している。

第三に、上記のような視点から分析することで、オガデン戦争に対するカーター政権の政策決定過程や、米ソ両超大国の同戦争への関与の様相について、新たな解釈を提示していることである。例えば、オガデン戦争をめぐるのは、米ソ共にアフリカの現存国境を維持するという原則の範囲内で同地における勢力争いを展開していたという指摘や、イスラエルとの対立を抱えるアラブ諸国独自の行動が、アメリカやソマリアの対外戦略を規定する大きな要因であったという本論文の指摘は、米ソ対立の論理と当該地域の論理が交錯する形で展開していたアフリカの冷戦の実相を解明するうえで重要なものである。

もとより改善すべき課題も存在する。カーター政権の対ソマリア軍事援助の決定及び中止をめぐる政策決定過程やデタントをめぐるソ連の政策決定過程、またソマリアが停戦に応じた理由など、仮説を更に丹念に構築・検証する余地がある論点が見受けられるほか、「逆代理戦争」のように、より詳細な定義が必要な分析概念も存在している。また文章・文体についても、読者にとって読み易いものとするため更に改善を行う余地がある。

以上のような論文の評価と口述試験の結果に基づいて、審査員一同は、申請者増古剛久氏に一橋大学博士（法学）の学位を授与することが適当であると判断する。